

「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



比留間 正二さん
昭和9年3月1日生まれ。
下土幌在住

私の生い立ちと 小学校時代の思い出

私

は昭和9年3月1日、比留間家の長男としてこの地で生まれました。父の

真七は大正7年、埼玉県から同郷の人を頼りに行李一つで移住してきたと聞いています。

昭和15年、下土幌小学校に入学、当時は地域に子どもが多く、1学年に45人ほどいました。翌年、太平洋戦争が始まると、時代は戦争一色になり、男の子は「夢は立派な兵隊さんになること」と話していました。

当時は木炭を燃料にした乗り合いバスが走っていて、冬にはバスに「そり」をつなぎ、雪の坂道を引っ張ってもらいました。

夏休みは友だちと朝から晩まで川遊びの毎日で、5年生になり、初めて十勝川の向こう岸まで泳ぎきったときは本当にうれしかったです。また同じ時期に、私の人生に長く影響を与えた恩師との出会いもありました。

音更空襲の記憶

昭

和19年頃、下土幌周辺には兵舎があり、訓練

する兵隊であふれかえっていました。子どもにとつて兵隊さんは憧れの存在、私も一生懸命後を追っていました。

昭和20年7月、音更空襲のときは防空壕に入っていました。私は好奇心から柏の木のかほみに身を伏せていました。恐る恐る頭を上げると、乗員の姿がわかるほどの低空を米軍戦闘機グラマンが飛行。十勝川温泉ホテルが機銃掃射されました。

戦後の食糧難

戦

後はとにかく食糧難で、自分で米を作っていました。

も食べることはできません。下土幌は「十勝の水田発祥の

地」でしたが、昔は今みたい苗を植える田植えではなく、直播でした。昭和20年は冷害の年、母親が白米代わりに用意してくれた「細かく砕いたとうきび」は、いくら食べようとしても、のどを通らなかつたことを覚えています。

国から食糧供出を決められ、時には喧嘩しながらも地域で協力し合い困難を乗り越えてきたことなど、今から思うと地域づくりにはプラスになったのかもしれない。

農協組合口長を 経験して

昭

和59年、農業経営を続ける中、50歳のときに

木野農協の組合長になりました。「地域に信頼される農協づくり」を柱に、常に相手を尊重し、話し合いながら活動を行いました。諸先輩や職員のご協力をいただき、平成6年にはハピオがオープンするなど、多くの出来事は私にとって貴重な体験となりました。

また、現在は更葉園の運営に携わり、地域の人には働き手として深く関わっていただ



17歳、高校生のときの写真

平和の尊さと 十勝農業の発展

以

前から私は、沖縄や九州などの戦跡や資料館

を巡り、語り部の話を興味深く聞かせてもらっています。

戦争は二度とあってはなりません。平和な今の日本では忘れがちですが、戦場で命を失った人たちの思いをしつかりと受け止め、学びながら後世に伝えていくことは大切なことだと思っています。

農業や農協を取り巻く環境も著しく変化しています。十勝・音更町にとって農業は基幹産業です。農業者が自分だけのことを考えず正しい方向を向いて協力し合い、農業を守り、地域がより発展することを心から願っています。